

他者への行為の促しと引き込み

養育者-子ども間のインタラクションデータから*

京都工芸繊維大学 深田 智

1. はじめに

子どもは、養育者とのインタラクションを通して、その社会の中で望ましいとされる行為を獲得し、社会を構成する一員となって、その文化を継承・形成していく (Ochs and Schieffelin 2014; Tomasello 2019, など)。本研究では、養育者と子どものインタラクションに焦点をあて、養育者が、どのようなことばを用いて、子どもを自分とのインタラクションに引き込み、子どもに行為(発話、思考、行動)を促しているのかを、日本語の「かな」に相当すると考えられる英語の I wonder に注目して検討する。

深田 (2017 など) 及び筆者の予備調査 (2018 年実施、養育者 36 名へのアンケート調査) から、日本人の養育者は、「子どもにじっくり考えてほしい」「子どもから返答・反応がほしい」「子どもの注意を自分に向けたい」などといった場合に、「できるかな?」「それ、あってるかな?」「だれが片付けてくれるのかな」「どうしたら当たるかな?」などのように「かな」を用いることがある、ということが明らかになっている。この「かな」の意味・機能は、大人同士のインタラクションにみられる「かな」とは異なる。大人同士の会話における「かな」は、安達 (2002)によれば、判断不明であることや疑念、聞き手に対する気遣いを表してはいるものの、聞き手からの回答・応答は特に求めていないとされ、また鈴木 (2015)では、聞き手との対立回避と自己防衛のために用いられるとされる。本研究では、〈対子ども〉発話における養育者の I wonder が〈対子ども〉発話における日本語の「かな」と同様の意味・機能を持っているのかを、文脈や子どもの年齢などに注目して考察する。またこれを通して、言語の違いを超えて見られる養育者のことばがけの普遍性についても考えたい。

2. 分析方法

CHILDES の Eng-NA (北米の英語母語話者のデータ) 内のすべてのコーパスから、I wonder を含む文とその前後 2~3 行を採取し、その 1 つ 1 つに関して〈対子ども〉発話かどうかを確認した上で、初出例をはじめとする興味深い事例を中心に再度コーパスにあたりながら、その意味・機能を子どもの年齢や場面にも注目して検討した。本稿で考察する課題は次の 2 点である。

- (A) 養育者は、何歳の子どものに向けて、どのような I wonder を用い、また、子どもはそれにどのようなことばや行為で応えていくのか
- (B) 英語の〈対子ども〉発話における I wonder は、日本語の〈対子ども〉発話における「かな」とどのような点で類似し、またどのような点で異なるか

3. 結果と考察

まず、課題(A)に関してである。(1-2)が示すように、I wonder は、子どもがことばを発するようになる前から用いられていた ((1)の子どもの月齢は 5 ヶ月 30 日、(2)は 7 ヶ月)。また、[疑問文+I wonder]や[I wonder+文?]などのように疑問形式と共起した事例も観察され、I wonder を含む文の後には、I (don't) think や (do) you {think/know}などの発話((2)参照)、I wonder で示された疑問に対する答えを得るための行動の促し((3)の let's)などに関することばが続く場合が見られ、子どもはそれに、無発話 ((1)参照) から発声で返す時期 ((3)参照) を経て、hm などの短い反応を示したり、I wonder で示された疑問に回答したり ((4)参照) するようになっていった。これらの事実から、〈対子ども〉発話の I wonder も、〈対子ども〉発話で用いられる「かな」と同様に、大人同士の会話で用いられる場合とは異なり、子どもからの反応・返答・回答を期待して発せられることばであり、子どもも徐々にこの養育者からの I wonder に適切に反応・応答するようになっていく、と考えられる。

次に、課題(B)に関してである。上述したように、〈対子ども〉発話における I wonder と「かな」は、ともに、子どもからの反応・返答・回答を期待して発せられることばであると考えられるが、日本語の〈対子ども〉発話の「かな」には、(上述した筆者の予備調査から)「宿題終わったのかな〜」「どうすれば良かったかな〜?」「何をやるんやっただかな〜?」などのように、子どもに今行うべき行動が何かを考えさせたり、過去の子どもの不適切な行動を反省させたりする用法もあるのに対し、この種の「かな」に相当する I wonder の事例は今回の調査では観察されなかった。ここから、〈対子ども〉発話における I wonder は、「かな」とは異なり、子どもから何らかの反応・返答・回答を求めることばではあっても、規範に沿った行動が何であるかを考えさせ、そ

れを促す、あるいは、それができなかったことを反省させる、といった機能はない、と予想される。

(1) CHI: Target_Child, Age: 0;05.30, MOT: Mother
MOT: that's not the one [=balloon] that you had in
your crib last night, sweetie .
MOT: **where: did that go, I wonder .**
MOT: **I wonder where we left that one .**
MOT: does that make you feel better ?
MOT: does that make you feel a little bit better ?
MOT: (..) let's see .
MOT: yeah .
MOT: that's calming you down . (Soderstrom)

(2) CHI: Target_Child, Age: 0;07.00, MOT: Mother
MOT: five pieces of pizza !
MOT: **I wonder if we can put them together to
make a whole pizza .**
MOT: oh you know what ?
MOT: I think we have six pieces of pizza .
MOT: we have six pieces of pizza .
(NewmanRatner)

(3) CHI: Target_Child, Age: 0;08.01, MOT: Mother
MOT: yes, mister dinosaur pajamas .
MOT: that's what we xxx .
MOT: **I wonder what Thomas has .**
MOT: let's see what he has .
MOT: let's bring him +//.
MOT: you're a good helper .
CHI: hu@b . (Soderstrom)

(4) CHI: Target_Child, Age: 1;11.17, PAT: Investigator
PAT: **I wonder what this does Peter [= jack] ?**
CHI: hm: .
PAT: **I wonder what you do with that .**
CHI: a (.) put here [!!] .
PAT: oh (.) put it here .
PAT: wan(t) (t)a change the tire ?
CHI: hm: . (Bloom)

4. 終わりに

本研究では、〈対子ども〉発話で用いられる *I wonder* が、日本語の「かな」同様、大人同士の会話で用いられる場合とは異なり、子ども（聞き手）からの反応（発話・思考・行動）を期待し、それを促すことばとして養育者によって用いられていること、また、子どもは徐々にそれに応じた反応をするようになっていくことを、両者の意味・機能の細かな違いにも注目して考察した。〈対子ども〉発話における「かな」や *I wonder* も広い意味での〈行為指示〉(directives) と呼べるのなら（〈行為指示〉に関しては遠藤・高田 (2016)も参照）、この2つのことばと他の〈行為指示〉のことばとの違いやその相互関係を、〈疑念表明〉、〈気遣い〉、〈質問〉、〈行為指示〉などといった発話機能との関連で検討する必要がある。この点に関しては稿を改めて論じる。

参考文献

- 安達太郎 (2002) 「質問と疑い」『新日本語文法選書4 モダリティ』, 174-202. くろしお出版, 東京.
- 遠藤智子・高田明 (2016) 「言うことを聞きなさい」『子育ての会話分析』, 高田明・嶋田容子・川島理恵 (編), 55-75, 昭和堂, 京都.
- 深田智 (2017) 「主体性・相互主体性の発達: 身体表現活動場面における指導者と子ども及び子どもどうしの言語的なやりとりを中心に」『第1回共創学会年次大会』, 16-21.
- MacWhinney, B. (2000) *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk*, Third Edition, Lawrence Erlbaum Associates, Mahwah, N.J.
- Ochs, Elinor and Bambi. B. Schieffelin (2014) "The Theory of Language Socialization," *The Handbook of Language Socialization*, ed. by Alessandro Duranti, Elinor Ochs and Bambi B. Schieffelin, 1-21, Wiley-Blackwell, Malden.
- 鈴木智美 (2015) 「意見表明に用いられる『かなと思う』」『東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集』 41, 61-78.
- Tomasello, M. (2019). *Becoming Human: A Theory of Ontogeny*, The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, MA.

注

*本研究は、文部科学省科学研究費（課題番号：19K02641）の助成を受けて行われている。CHILDES からのデータの抽出や整理、ドラフトのチェックにご協力いただいた筆者の研究支援員の皆様、また、予備調査にご参加くださった養育者の皆様にここに記して感謝申し上げます。